

名を鷹窓といふ、此山の縁記を聞けば、人皇四十代のみかど、天武天皇の朝、白鳳年間、役行者の開基にて、倉稻魂神勸請の地なり、此山のみたらしの大池あり、大沼と名付く、是は池の形大の字に略似たるをもて名付しとかや、此池に奇妙の靈異あり、世間未會有の奇事なれども、かゝる僻遠の地なる故、尋入る人も稀々にて、知る者すくなし、いかなる事ぞといふに、池の中に六十六の島ありて、其島時々に水面を遊行す、島の數六十六といふは、日本成就の形相といふ、其昔行基菩薩も此池に至り、實方中將も此浮島を見物し給ひしとぞ、實方遊びたまひし時、

四ツの海波静なる亥るしにやおのれと浮て廻る島哉

と詠置給ひしといひ傳ふ、池のほとりに古松二株あり、一株を實方中將の島見松といふ、實方此松に倚りて島を見給ひしと也、其時明神感應ありて池水を巻上て、松の根までそゝぎじとて、一株の松を浪上松といふ、浮島常は池の岸に引付て渚のやふに見ゆ、其中にて最大なるを奥州島と名付く、其餘の島々も皆國々名ありじかど、今はまざれて何國といふこと、亥かとわからず、唯一所池の中へ突出たる岸根を蘆原島といふ、此島ばかり動かす、昔より同じ所にあり、又池の向ふの方の右の方によりて浮みたる色黒き木の株のごときものあり、是を浮木と名付て、天下の吉凶を占ふとぞ、浮たる時は天下太平の象なり、沈みて見えざれば、必變を示すとなり。○下略

〔東遊雜記〕世にしる大沼と云所へ、此邊よりは僅に六七八里の所といへども、御巡見所にあらざれば行す、至て殘念に思ひしゆへに、案内のものはいふに及ばず、村々の役人町々の年寄拵に近よりて尋聞しに、大沼へ度々參詣せしもの、いふ、山の頂に方五六六十間と覺しき沼あり、傍らに大沼權現と稱せる社ありて、別當は山伏にて、少しき寺院也、拵沼の中浮島六十六島、大ひなる島方五六尺、小なる島は僅に方一尺計、諸草生じてあり、諸人參詣すれば、山伏出て、何れの島は何の國、彼の島何の國と、大小によりて六十六ヶ國に表し、信心なる人の目には、ことごく島と見